（4）　埼玉県で栽培中のオキナワテンナンショウ2個体が，1978年12月に雄花序をつけたが，次に開花した1980年1月には雌花序をつけた。この2個体は雄の時にはそれぞれ長さ 12 cm および 13 cm の花柄を持ち，仏炎苞の筒部は長さ 4.5 cm および 5 cm と短くて倒円錐状をなし，付属体は先端がやや頭状でその基部には角状の突起がなかった (Fig. 4-c)。ところが雌に変わった状態ではそれぞれ長さ 4.5 cm および 5.5 cm の花柄を持ち，仏炎苞の筒部は共に長さ 6.5 cm と長くてほぼ円筒状をなし，付属体は細棒状で基部に多くの角状の突起をつけた (Fig. 5-a)。一方，1980年2月に沖縄島の安和岳で，開花中の雄株の球茎上に，果実をつけた前年の花柄が枯れずに残っているオキナワテンナンショウを発見した (Fig. 5-b)。このようにオキナワテンナンショウでは，すでに知られている他の種類，*Arisaema triphyllum* (Schaffner 1922)，*A. dracontium* (Schaffner 1922)，*A. japonicum* (前川 1924)，*A. ringens* (日野 1953) 等と同様，同一個体の性が転換するが，特徴的なことはその際上記のような雌雄の形態の変化を伴うことである。このように性の転換に伴う著しい外部形態的な変化はテンナンショウ属では初めての実例であると思われる。

終りに，標本を調べるに際し便宜を与えて下さった京都大学岩槻邦男教授，野外調査の際に協力していただいた東京大学総合研究資料館立石庸一助手，沖縄県名護市中島邦雄氏にお礼申しあげます。

□山草事典　416+35 pp. 1980年4月，￥2,000. 月刊さつき研究社（栃木県鹿沼）。近頃は山草ブームである。これは，それに応じて400種あまりを，アイウエオ順にカラー写真一つに，特徴，花期，分布，栽培について簡単に記したもの。16人の撮影の写真が出ているので割合に変った写真が多く楽しめる。　　（前川文夫）

□Clarke, G. C. S. and Duckett, J. G. (ed.) : **Bryophyte Systematics.** 582 pp. 1979. Academic Press, London. ￥29,440. この本を手にしての第一印象は値段の高いことである。紙質もよいものをつかっているのだからか，恐ろしく高価な感じがする。この本は1978年8月にイギリスの Bangor でおこなわれた，イギリス蘚苔類学会，分類学会共催の，蘚苔類の分類系統に関するシンポジウムに提出された21論文を集録したものである。いろいろな分野からのアプローチのし方がみられ興味深いが，21論文の中には，あまりよく問題を堀りおこしていないものもいくつかある。R. E. Longton : Climatic adaptation of bryophytes in relation to systematics や H. V. Neidhart : Comparative studies of sporogenesis in bryophytes など，今後への問題提起をかかえたものもある。現在の蘚苔類研究の主要部を占める分類系統論の様相をつかむには好都合の論文集である。　　（井上　浩）